

# 六花

俳句雑誌

りっか

6

*designed by Tomoko Tanaka*



訪  
戴

山田六甲



文鳥忌二句（五月二十六日）

碑も墓も石なり麦の秋  
薄命の色に咲きけり藤の花  
ひとところ破れてをりぬ藤の天  
藤の花泣いてはなにも生まれぬ  
食欲の戻つてきたる鯉のぼり  
八十八夜とよすけ豊助まんぢゅう買うて来し  
鳶影に日傘一瞬打たれたる  
茅花風途中で消えし道標  
てのひらに風化せる石不如帰  
白牡丹今日を限りのご開帳

ひとひらの牡丹散りけり傘しづく  
垂れてからそののち知らず藤の花  
雨女雨の子猫を抱き上げし

須磨寺五句

こんなにも短い檜木蟬の穴  
十三は供養の数か百日紅  
線香の太く短く夏落葉  
木下闇魚鳥塚に鯖大師  
雄どもに追ひまはさるる金魚かな  
蜘蛛の圍に困惑の体揚羽蝶  
しなやかに夏手袋で辞書めくる  
苔包む鼓が滝の絹しぶき  
あぢさゐや憎さ余つて可愛さ百倍

無鑑査同人作品

# 六 卿 集

(五十篇送り)

モデル

梶浦玲良子

二礼二拍手一礼以下朧

抜け殻へそろそろと寄る春の蝉

春の使者迎へる鍵をかきこそと

突き出してモデルの歩くヒヤシンス

湖へ垂る八十八夜の縄梯子

## 蓬餅

木内美保子

ほのぼのと野の香丸めて蓬餅  
時折りに海へ花飛ぶ梅日和  
満員の坊ちゃん列車に春日燦  
鳥帰る遠き彼方の海光る  
椶の芽やするどき棘が指を刺す

## 告げず

中村房枝

どこにでも豆の花咲き丹波に  
乳足りて祭囃子に寝まりをり  
橋をゆく人も暮れたり太宰の忌  
赤んぼに首なめられて麦の秋  
たれの忌か告げず夕べの薔薇にをり

飯 蛸

鳴海 清美

道場に張り裂ける声寒の明  
 石落し塞ぎたる城冴返る  
 岩攀じる人影ふたつ風光る  
 早春のキャッチミットへ球の音  
 飯蛸を噛みて潮の香探りけり

冴 返 る

二 瓶 洋 子

白昼の音の消えぬる寒戻り  
 内よりの施錠隣家の春の昼  
 北斗の柄うす雲かかり冴返る  
 冴返る脱衣に派手な静電気  
 夫読書吾はもの書く春炬燵

## 天道虫

松山 律子

父の日の記念切手が見当たらない  
父の日の自分に賞をあげようか  
てんと虫飛んでけ戦火止む日まで  
梅雨の間の降りてもみたい、とある駅  
ジューンブライド妥協するのも選択肢

## 雀の子

小田 元

雀の子友達連れて戻りけり  
目高の子ペットボトルに整列す  
いろは蔵今年も梅の匂ひけり  
ままごとの客に招かれ桃の花  
野良犬に種物屋迄まとわれる

# 赤んぼに首なめられて麦の秋

中村 房枝

どこにでも豆の花咲き丹波にゐ

乳足りて祭囃子に寝まりをり

橋をゆく人も暮れたり太宰の忌

たれの忌か告げず夕べの薔薇にをり

赤ん坊を両手で抱いていると顔や首のあたりは無防備なのだ、くすぐったさやひやつとした赤ちゃんの舌の質感、予想外の行動など状況は作品のとおりであり、また、麦秋には越えがたい端境期をやつと越えたという安堵感がこもっているという。その不意をつかれた驚きが伝わってくる。房枝さんは常に一年熟成させた句だけを発表。



同人作品

# 檜木集



椿坂

中野 哲子

足湯して帰りませんか椿坂  
吉報の遠く近くにサクラ咲く  
王林の転がりやすき佇まい  
アネモネの一輪ざしに偲ぶ会  
口紅は色なきいろに桜咲く

啓 蟄

田中 武彦

啓蟄や凡才句作始めたる  
啓蟄の朝寝を妻に起こさる  
屋根雪の雨水の水が樋を出づ  
一つ消え一つ生まるる雪間かな  
雪囲解きゐて棘に刺されけり

イケメン

西塚 成代

父が子に孫に見せたし祖父の花  
斑雪集めて作る黒だるま  
退職すおにぎり山に花の咲き  
イケメンの制帽脱がす春嵐  
お花見の蕾太りて空仰ぐ

# 菜根譚



## 六甲

梅の鉢抱えて帰る風の中

馬場美智子

季語が「梅」だとしたら梅の花が咲いている状態として解釈しなければならぬからそのようにする。句中の主人公（作者であることが多い。他人の場合は多く川柳）が梅の咲いた鉢を抱えて帰宅途中風が吹いた。せつかくの梅が散るのではないかと心配になって身体で庇うようにしている様子が鮮明に伝わってくる。また、その鉢を持って帰ることになった経緯なども読者が想像を広がらせるのである。原因を述べないことも俳句の必要条件なのだ。

春の風邪脚を曲げたり伸ばしたり

松本文一郎

風邪引きでも春の風邪になると、どちらかという冬風の風邪のように厳しい右ではなく、急に冴え返った時など、ちよつとした油断で引くばあが多い。だが、春の風邪は長引く場合があつて、なかなか治りにくいのも事実。主人公は熱で衰弱してけだるくなつた脚の持つて行きどころを失っているのである。大いに気分的な発散も狙って脚を伸ばしたり曲げたりして無聊をかこつのである。春風邪の特徴をよく表現してある。

# 六花集



浜田久美子

踏みさうになりしところよすみれ草  
山の音聞いてをりけり仏の座  
御簾越しの仏見えたり春の風  
庭石に蠟燭の跡花三分  
結界の竹越えて辞す花の寺

こ  
と  
り

淋しさを煽りたてるな雪女  
粉雪が積もるよコーヒー飲むうちに  
雪見酒火照りし頬を寄せあいて  
雪深しここに埋もれてしまおうか  
風花は天のてのひらから零る

林 裕美子

君からの返事と思ふ春吹雪  
悲しみの中めしうまし春の雨  
春の風邪もうしかる人なくなりぬ  
春の空鳥に時間を盗まれし  
岐路に立つ背の大きくて春の空